

## パフォーマンス課題受講者の追跡調査

—高大接続にかかわるパフォーマンス評価の検証—

中切 正人, 橋本 康弘, 大久保 貢 (福井大学)

高大接続を意図したパフォーマンス課題を受講した高校生が得た評価と福井大学選抜試験との合否、および、合格者の福井大学入学後の学業成績との関係について追跡調査した。その結果、受講者のパフォーマンス評価と選抜試験の合否との間に有意差は確認されなかったが、一般選抜に比べてセンター試験の配点比率が低い推薦入試ではコミュニケーション力の評価の高かった受講生が合格した可能性が推定された。そして、受講者のパフォーマンス評価と入学後の学業成績との間に相関は認められなかったが、高大接続プロジェクトを主体的に受講して思考力とコミュニケーション力の高い評価を得た受講者ほど、入学後の学業成績と修得単位数の双方で上位に位置している可能性が推定された。

キーワード：追跡調査、パフォーマンス評価、高大接続、学業成績、選抜試験

### 1 はじめに

#### 1.1 本研究の背景と目的

本研究は、パフォーマンス課題とその評価を国立大学の総合型選抜・学校推薦型選抜（AO 入試・推薦入試）に活用して、汎用的な選抜・評価方法の確立を目指す実証的研究である。本研究のパフォーマンス課題と評価は、近代大学の創設者フンボルトの理念「文系ゼミナール教育（理系は実験室教育）」（潮木, 2004）に基づくものである。

本研究は、これまで福井大学アドミッションセンターが主催した課題探究プロジェクト事業にかかわる資料を用いる。この事業は、2017 年度から 2019 年度にかけて福井県内の高等学校 2 年生を主たる受講対象として 10 回実施された、文系ゼミナール教育を模した課題探究プロジェクトである。福井県内の高校と、静岡大学・三重大学・福井大学の先生方の協力を得て実施された。この一連のプロジェクトでは、パフォーマンス課題「2050 年の未来の中学校のカリキュラムの作成」とそのパフォーマンス評価が行われた。

本研究は、最初に、これらのプロジェクトを受講した受講者の中で、福井大学を受験した受講者の合否とプロジェクト受講時のパフォーマンス評価の結果との有意差について分析・考察する。次に、福井大学に合格して入学した受講者の福井大学入学後の学業成績と、プロジェクト受講時のパフォーマンス評価の結果との相関について分析・考察することを目的とする。

### 2 調査方法

#### 2.1 調査対象

本研究の調査対象は、第 1 に、2017 年度と 2018 年度と 2019 年度に福井大学で実施した課題探究プロジェクト「2050 年の未来の中学校のカリキュラムの作成」におけるパフォーマンス評価の結果である。

調査対象のプロジェクトの内訳は、2018 年度と 2019 年度と 2020 年度の福井大学の選抜試験を受験した受講者がそれぞれプロジェクトを受講した 5 回分である。まず、2017 年 12 月 16 日実施のプロジェクトには福井県内の高等学校 9 校の 1 年生 21 名、2 年生 31 名、3 年生 5 名の合計 57 名（男 16 名、女 41 名）が受講し、パフォーマンス評価は高校側 7 名および大学側 5 名の合計 12 名の評価者が実施した。以下同様に、2018 年 3 月 17 日のプロジェクトには県内の高校 3 校から 2 年生 16 名（男 8 名、女 8 名）が受講し、大学側 2 名が評価した。2018 年 6 月 23 日のプロジェクトには県内の高校 4 校から 2 年生 22 名、3 年生 5 名の合計 27 名（男 10 名、女 17 名）が受講し、高校側 6 名と大学側 3 名の合計 9 名が評価した。2018 年 9 月 29 日のプロジェクトには県内の高校 3 校から 2 年生 9 名（男 7 名、女 2 名）が受講し、高校側 2 名と大学側 1 名の合計 3 名が評価した。2019 年 12 月 21 日のプロジェクトには県内の高校 3 校から 2 年生 12 名、3 年生 2 名の合計 14 名（男 7 名、女 7 名）が受講し、大学側 5 名が評価した。以上、5 回分の合計 123 名の高校生がプロジェクトを受講した中で、38 名の受講者が福井大学を受験した。

調査対象の第 2 は、上記のプロジェクト受講者の中から、2018 年度と 2019 年度と 2020 年度の福井大

学の選抜試験を受験した受講者 38 名の合否結果である。合計 26 名が合格した。

調査対象の第 3 は、2018 年度と 2019 年度の福井大学の選抜試験を受験して合格し、その後福井大学に進学して、2020 年度に福井大学教育学部の 2 年生および 3 年生として在籍する 14 名の受講者の、福井大学の学業成績である。さらに、14 名の受講者が在籍する教育学部の在籍生全体の学業成績である。

なお、2020 年度の福井大学の選抜試験に合格し、2020 年度に福井大学の 1 年生として在籍する受講者 10 名の学業成績については、本稿の執筆時点で学業成績を得られなかったため、調査対象から外す。また、国際地域学部合格して 2 年生に在籍している 2 名の受講者については、次の調査対象とする。

### 2.1.1 調査対象が受講したプロジェクトの概要

この項の記述は今回の一連のプロジェクトのモデルとなった 2017 年 12 月 16 日実施の第 1 回プロジェクトの概要で、中切・橋本・宮下・大久保 (2019) に基づく。

プロジェクト当日の朝、受講者は受付で『未来の学校づくりに関する調査研究報告書』（国立教育政策研究所, 2013）の抜粋部（全 14 頁）の要約が課せられた事前課題を提出した。そして、後日この提出課題を元に「理解力」が測定・評価された。

午前の講義では、最初に事前課題の資料に加えて、2050 年の未来が描かれた資料（日本交通計画協会自主研究会, 2011）を元に作成した、未来の学校風景のスライドが提示された。次に、プロジェクト用に創作された未来の学習指導要領、およびカリキュラム表の作成方法のスライドが紹介された。その上で、受講者は各自で第 1 回目のカリキュラム表を作成することが指示された。後日、このカリキュラム表を元に「適用力、分析力」が測定・評価された。そして、小休憩の後、グループ毎に各自のカリキュラム表を紹介しあい、その後昼食となった。

午後のグループワーク①では、最初にグループ毎にカリキュラム作成の方針が検討され、カリキュラム表を囲んで話し合いが進んだ。ここで、カリキュラムが完成するまでの 2 時間、評価者により「相互理解力、伝達工夫力、共同創作力、進行調整力」が測定・評価された。次のグループワーク②では、およそ 30 分かけてプレゼンテーションの模擬練習が繰り返された。プレゼンでは、各グループ 1 人 2 分の発表に対して「表現力①、表現力②」が測定・評価された。プレゼン終了後は、ここまでの活動を総括しつつ各自の

考える 2050 年のカリキュラム表が作成され、後日これを元に「評価力、創造力」が測定・評価された。

### 2.1.2 調査対象のパフォーマンス評価の概要

この項の記述は、中切ほか (2019) および中切・橋本・宮下・大久保 (2020) に基づく。評価者によりルーブリックを用いて評価された、パフォーマンス評価の構成要素とその評価規準を示す。

まず、事前課題と当日作成されたカリキュラム表を元に「情報収集力：理解する、適用する」と「高次の思考力：分析する、評価する、創造する」で構成された「思考力」が測定・評価された。これは、アンダーソンらの改訂版タキソノミー (Anderson, 2001) の認知過程次元に相当し、また、学習指導要領の「知識・技能」「思考力・判断力」に対応すると考えられる。

以下、2017 年 12 月段階の評価規準を記す。

- 「理解力」：事前課題の資料の趣旨を要約する能力。
- 「適用力」：諸資料（文献や当日の解説）を引用して、それを根拠に自己の見解を解説・検証する能力。
- 「分析力」：2050 年の学習指導要領の趣旨とカリキュラムの関係（強弱、+-等）構造化する能力。
- 「評価力」：資料に基づいて未来のカリキュラムのプラス面とマイナス面に留意し、判断を下す能力。
- 「創造力」：新たなカリキュラムを生み出したり、その設計プランを計画したりするなど、より包括的な教育システムを作り出す能力。

次に、グループワークとプレゼンテーションでは「コミュニケーション力：相互理解力、伝達工夫力、共同創作力、進行調整力、表現力①②」が測定・評価された。これらは、学習指導要領の「表現力」「主体的に学習に取り組む態度」に対応すると考えられる。

以下、2017 年 12 月段階の評価規準を記す。

- 「相互理解力」：他者の意見に耳を傾けて合理的な理解・判断を下したり、共感したりする能力。
- 「伝達工夫力」：他者の意見に対し論理的な質問をしたり自分の考えを伝える工夫をしたりする能力。
- 「共同創作力」：他者と共同して一つの研究成果をまとめ、完成させる能力で、以下の 4 観点で構成。
  - ①メンバーに敬意を払い礼儀正しく振る舞う。
  - ②明るい話し方などで前向きな姿勢を伝える。
  - ③メンバーの能力を信頼してみんなで課題を達成できるという確信を伝え、やる気を高める。
  - ④メンバーを手助けしたり励ましたりする。
- 「進行調整力」：メンバーから意見をうまく引き出し、最終的な合意を導くファシリテーションにかかわる能力で、以下の 4 観点で構成。①意見やアイデ

アを出やすいムード作りをする。②意見や議論をまとめて合意形成を促す。③議論すべき内容へ誘導する。④話し合いの合理性を高める。

「表現力①」：プレゼンテーション時に、話術（姿勢・声の表現等）を駆使し、メッセージを聴衆に伝達できる能力。

「表現力②」：プレゼンテーション時に、発表者が中心的なメッセージを聴衆に伝達できる能力。

以上の「思考力」と「コミュニケーション力」の各構成要素のパフォーマンスレベルを示す評価基準を4段階とし、「3」を基準点に「4」を最高点とした。

## 2.2 本研究の2つの分析対象とそれぞれの分析方法

追跡対象の受講者の選抜試験の可否結果と入学後の成績管理については、「福井大学の保有する個人情報保護に関する規程」に基づいて厳格に対処した。

### 2.2.1 分析対象（1）：福井大学の「選抜試験」

最初の分析対象は、2018年度と2019年度と2020年度の福井大学の「選抜試験の可否判定」と、その選抜試験を受験したプロジェクト受講者の「パフォーマンス評価の結果」である。評価結果は【表1】と【表2】に示す様にプロジェクトで評価された5つの思考力と6つのコミュニケーション力のそれぞれの平均値、およびそれらを合わせた「全体の平均値」である。

### 2.2.2 分析対象（2）：福井大学の「学業成績」

2つ目の分析対象はプロジェクト受講者の福井大学入学後の「学業成績」と、「プロジェクト受講者の評価結果：全体の平均値」である。福井大学での「学業成績」にはGrade Point Average（以下、GPAと表記）と「修得単位数」を用いた。

GPAは、5段階評価を採用している教育学部の学生に対しては「秀S=4、優A=3、良B=2、可C=1、不可=0」により算出した。「修得単位数」は在籍生の学業努力を示す指標としてとらえ、GPAと修得単位数が共に高い学生ほど、努力を惜しまず優秀な成績を収めた模範的な学生としてとらえている。

## 3 分析結果と考察

### 3.1 選抜試験との相関

#### 3.1.1 福井大学文系学部の選抜試験の概要

最初に、プロジェクト受講者が受験した福井大学文系学部の特別入試について紹介する。教育学部の入学定員は100名で、国際地域学部の入学定員は60名である。その中で、教育学部と国際地域学部ではセンタ

ー試験を課す「推薦入試Ⅱ（以下、推薦Ⅱと表記）」が実施され、教育学部では28名（2020年度は26名）、国際地域学部では10名が定員とされた。次に、国際地域学部ではセンター試験を課さない高大接続型入試の「AO入試Ⅰ（以下、AOⅠと表記）」が実施され、2019年度から5名が定員とされた。

教育学部の推薦Ⅱは面接型で（実技型は美術、音楽）、調査書の評定平均4.0以上の志願者が5教科もしくは6教科のセンター試験（450点）と、面接（プレゼンテーションと口述試験：450点）、調査書・推薦書・志願理由書を元に選抜された。また、教育学部の前期日程（以下、前期と表記）では900点満点のセンター試験に加えて、600点満点の個別学力検査（英語か数学が必修で300点、国語・地歴公民・英語から選択1教科300点）が課された。一方、5教科以外の教科では、たとえば音楽の個別学力検査では500点満点の実技と100点満点の面接の合計600点満点が課された。そして、後期日程では900点満点のセンター試験に加えて、400点満点の個別学力検査（小論文）が課された。

国際地域学部の推薦Ⅱでは、調査書の評定平均4.0以上の志願者が5教科もしくは6教科のセンター試験（450点）と、個人面接（450点）、調査書・推薦書・志願理由書を元に選抜された。さらに、AOⅠでは、第1次選考で調査書・志願理由書・高校での取り組み等のレポートが課された。そして、その合格者は第2次選考で高校での取り組みのプレゼンテーションと面接が実施されて総合的に選抜された。

#### 3.1.2 プロジェクト受講者の選抜結果の分析と考察

表1に、2018年度と2019年度と2020年度の福井大学の選抜試験を受験した38名のプロジェクト受講者について、それぞれ合格者（26名）と不合格者（12名）と全体（38名）に分けて、パフォーマンス評価の平均値を示す。さらに、表2では38名のプロジェクト受講者について、一般選抜に比べてセンター試験の配点比率が低く二次試験で面接等を課す推薦Ⅱとセンター試験を課さずに面接等を課すAOⅠ、および、センター試験の配点比率が高く二次試験で個別学力検査を課す一般選抜の2グループに分けて、それぞれの合格者と不合格者のパフォーマンス評価の平均値を示す。

選抜試験別に見ると推薦Ⅱは受験者17名の中で13名が合格し4名が不合格、AOⅠは1名が受験し合格した。そして、前期は受験者19名の中で11名が合格し8名が不合格、後期は1名が受験し合格した。

表 1 を見ると、合格者 26 名のプロジェクトの評価の「全体の平均値」の平均は 3.10 で、不合格者の平均はそれを下回る 2.87 だった。しかし、プロジェクト受講者の「全体の平均値」を元にして、合格者 26 名と不合格者 12 名の母平均の差の検定(両側 t 検定: 有意水準 0.05)を実施したところ、p 値は 0.12 となり帰無仮説「合格者と不合格者の母平均は等しい」は棄却されず、合格者と不合格者の「全体の平均値」に統計的に有意差が認められなかった。

しかし、表 1 に示す様に合格者と不合格者の「思考力」と「コミュニケーション力」の各構成要素やそれぞれの平均値に差が認められ、さらに「全体の平均値」には 0.24 の差がある。そこで、合格者と不合格者の「全体の平均値」に有意差が認められなかった原因を考察する。

有意差無しの原因の一つとして、不合格者の中で「全体の平均値」が最高点であった 1 名の受講者の数値が他の不合格者の数値よりもかなり高いものであり、かつ、その数値は合格者の「全体の平均値」の最高点と等しいものであったことが推定される。このケースが特異なものであったかどうかについては、今後の追跡調査の蓄積によりデータを増やし、再度検証を試みることにしたい。

このように、プロジェクト受講時の評価の高低と選抜試験の可否との間に有意差は認められなかったが、表 1 と表 2 に示す様に合格者と不合格者の数値にある程度の差が見られるため、その差について考察を加える。なお、表 1 と表 2 では、それぞれ合格者と不合格者の数値の高い方に網掛けを施している。

まず、表 1 でプロジェクトの評価項目の「思考力」と「コミュニケーション力」の平均値を見ると、双方とも合格者の平均値の方が高い。さらに、「思考力」と「コミュニケーション力」のそれぞれの構成要素 11 項目を見ると、8 項目で合格者が不合格者を上回り、残りの 3 項目は等しくなっている。以上、合格者のプロジェクトの評価は「思考力」と「コミュニケーション力」の双方でその高さが確

認される。

次に、表 2 で選抜試験別に「思考力」と「コミュニケーション力」の平均値を見る。まず、一般選抜に比べて合否に占めるセンター試験の比率が低い推薦Ⅱとセンター試験を課さない AOⅠでは、「思考力」において 1 項目の構成要素のみが不合格者を上回ることに対し、「コミュニケーション力」では 3 項目が不合格者を上回っている。そして、合格者の「思考力の平均値」3.44 は不合格者を下回るが、「コミュニケーション力の平均値」2.84 は不合格者を上回っている。ここから推薦Ⅱと AOⅠでは、センター試験の様に紙ベースで測定された「思考力」よりも、受講者間のグループワークとプレゼンテーションで発揮された「コミュニケーション力」の高さが合否に影響を及ぼしたものと推定される。

これに対して、紙ベースで測定・評価されるセンター試験の配点比率が比較的高く、二次試験でもほぼ紙ベースの試験で測定・評価される一般選抜を見ると、プロジェクトにおいて紙ベースで測定された「思考力」の 6 項目中の 5 項目の構成要素が不合格者を上回り、コミュニケーション力においても 8 項目中の 6 項目で上回っている。そして、一般選抜におい

表1 プロジェクト受講者の評価結果と本学の選抜試験の合否

プロジェクトで測定・評価された能力	思考力					コミュニケーション力						思考力の平均値	コミュニケーション力の平均値	平均全体の値
	理解力	適用力	分析力	評価力	創造力	相互理解力	伝達工夫力	共同創作力	進行調整力	表現力①	表現力②			
合格者平均値 (n=26)	3.1	3.1	3.2	3.8	3.8	2.9	3.0	2.8	2.8	2.9	2.7	3.40	2.84	3.10
不合格者平均値 (n=12)	2.9	3.1	3.2	3.3	3.5	2.9	2.6	2.5	2.4	2.5	2.7	3.21	2.59	2.87
全体平均値 (N=38)	3.0	3.1	3.2	3.6	3.7	2.9	2.9	2.7	2.7	2.8	2.7	3.34	2.77	3.03

表2 プロジェクト受講者の選抜試験別の評価結果と選抜試験別の合否

プロジェクトで測定・評価された能力	思考力					コミュニケーション力						思考力の平均値	コミュニケーション力の平均値	平均全体の値
	理解力	適用力	分析力	評価力	創造力	相互理解力	伝達工夫力	共同創作力	進行調整力	表現力①	表現力②			
合格者平均値 推薦Ⅱ・AoⅠ (n=14)	3.1	3.3	3.2	3.8	3.8	2.8	3.0	2.7	2.8	3.0	2.8	3.44	2.84	3.11
不合格者平均値 推薦Ⅱ (n=4)	3.3	3.4	3.6	3.6	3.8	2.8	2.8	2.7	2.0	2.5	2.8	3.53	2.60	3.02
合格者平均値 前期・後期 (n=12)	3.0	3.0	3.1	3.8	3.8	3.0	3.0	2.9	2.8	2.8	2.6	3.35	2.85	3.07
不合格者平均値 前期 (n=8)	2.8	3.0	3.0	3.2	3.3	3.0	2.4	2.4	2.5	2.5	2.6	3.05	2.57	2.79

では、合格者の「思考力」の平均値 3.35 も「コミュニケーション力」の平均値 2.85 も共に不合格者を上回っている。以上より、「コミュニケーション力」のみが不合格者の平均値を上回った推薦Ⅱ・AOⅠと比較した場合、一般選抜では紙ベースの「思考力」の評価も可否にかかわった可能性が推定される。

### 3.2 入学後の学業成績との相関

#### 3.2.1 福井大学合格者の入学後の学業成績

図 1 は、福井大学教育学部に合格して入学したプロジェクト受講者の 3 年生と 2 年生の合計 14 名について、プロジェクト受講時のパフォーマンス評価と福井大学入学後の GPA との相関関係を表す散布図である。ピアソンの積率相関係数を用いて分析した結果、 $r=0.45$ ,  $p=0.11$  が得られた。よって、プロジェクト受講時の成績と福井大学入学後の GPA との相関は認められなかった。また、図 1 には回帰直線を示したが、相関係数の 2 乗の  $R^2$  値は 0.20 と低く、回帰式が成立する可能性は低い。

以上の、プロジェクトの評価と GPA との相関が無いという分析結果の一因として、分析対象者の数の少なさが推定される。今後は、分析対象のプロジェクトを継続して受講者が福井大学へ合格するケースを蓄積し、合わせて合格後の受講者の GPA を蓄積することによってデータを積み重ね、再度検証を試みる。

そこで、これ以降の分析には、福井大学での学業成績の指標として新たに「修得単位数」の項目を加え、GPA と修得単位数をそれぞれ x 軸と y 軸とする散布図を作成する【図 2, 図 3】。そしてそれぞれの図中に、教育学部の 3 年生と 2 年生の在学生のデータを位置づけ、さらにその中にプロジェクト受講者を位置付け、合わせてプロジェクト受講時の評価を記す。

ここで、修得単位数を加えた理由は、第 2 節で既述した様に、修得単位数は学業努力を示す指標であり、GPA と修得単位数が共に高い学生ほど優秀な学業成績を収めた学生として考えられるからである。さらに、GPA と修得単位数のマトリクスに在籍学年の学部生と受講者を位置付ける理由は、プロジェクト受講者の学業成績を学部生全体という広い視野の中で位置づけ、プロジェクト受講生の受講時の評価の高低が福井大学入学後の学業成績とどの様にリンクするものであるかどうか確認するためである。

以下、学部全体の広い視野に立って、プロジェクト受講者の受講時の評価と、拡張した学業成績との相関関係を分析・考察することにした。具体的には、同学年の学部生の所属する学年全体の学業成績を上位層・中位層・下位層として、各層の人数が大体等しくなる様に 3 区分する。そして、受講者がどの層に属しているのか確認する方法をとる。

図 2 の y 軸の数値は 2020 年度現在 3 年生 102 名の 2 年生までの成績、すなわち 2018 年度から 2019 年度までの 2 年間の GPA を示している。そして、x 軸の数値は 2018 年度から 2019 年度までの修得単位数を示している。同様に、図 3 の y 軸は 2020 年度現在教育学部 2 年生 102 名の 1 年生の成績、すなわち 2019 年度の GPA, そして、2019 年度の修得単位数を示している。さらに、それぞれの図の中にプロジェクト受講者を位置づけ、図中には受講者の ABC 等の仮名とプロジェクト受講時のパフォーマンス評価の「全体の平均値」を記している。

図 2 と図 3 に示す様に、指標とした教育学部生の GPA と修得単位数には低い正の相関が見られる。図 2 の教育学部 3 年生の相関係数は 0.32 ( $p<0.001$ ) であり、図 3 の教育学部 2 年生の相関係数は 0.41 ( $p<0.001$ ) である。なお、両図において点線で囲った 2 つの部分には、在籍する学年の学業成績を概略的に 3 区分した中の、上位層と中位層を示したものである。GPA と修得単位数が共に高い右上の点線で囲った部分を上位層として示し、その下の点線で囲った部分を中位層として示した。これらを用いてプロジェクト受講者の福井大学入学後の学業成績と、プロジェクト受講時の評価との関係を分析・考察することにした。

#### 3.2.2 パフォーマンス評価と学業成績の分析と考察

図 2 を見ると、まず、プロジェクトである程度高

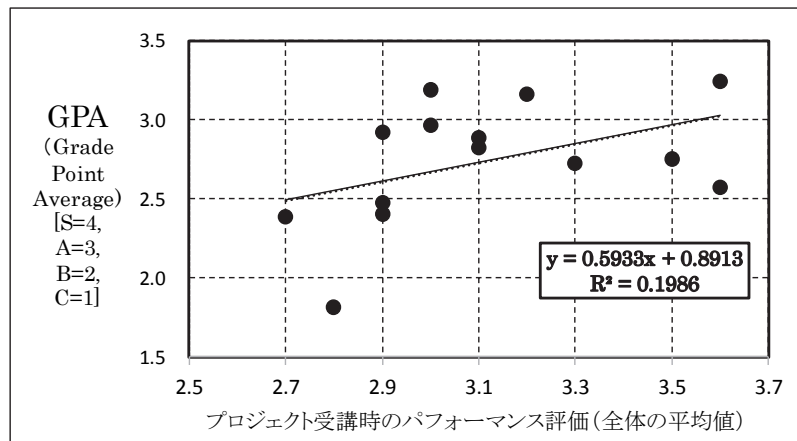


図1 プロジェクト受講者の教育学部の成績(2・3年生のGPA)とプロジェクトの評価

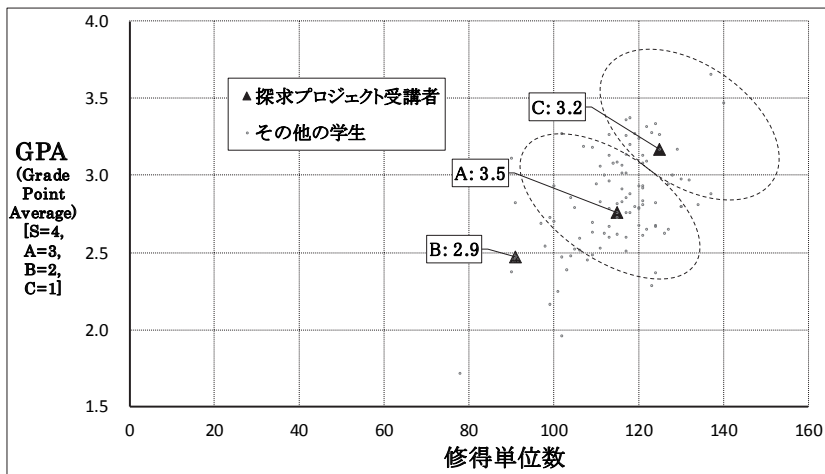


図2 教育学部2年後期終了時成績(H30年度入学生102名)

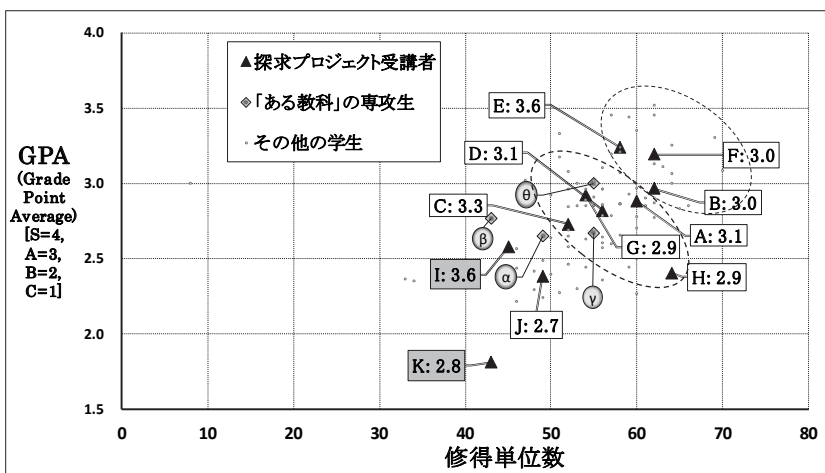


図3 教育学部1年後期終了時成績(H31年度入学生102名)

い評価の 3.2 を受けた受講者 C が GPA と修得単位数が共に高い上位層に位置している。次に、プロジェクトで大変高い 3.5 の評価を得た受講者 A が中位層に位置している。そして、プロジェクトで低い評価を得た受講者 C が下位層に位置している。

プロジェクト受講時の評価の上位と中位が入れ替わっているものの、プロジェクト受講者の中の合格者の全体の平均値の 3.10 を超える A (3.2) と C (3.5) は中位層以上に位置している。以上より、プロジェクト時の評価と大学入学後の学業成績との相関がある程度確認されると考える。

次に、図 3 でプロジェクト受講者が比較的多い 2020 年度現在教育学部 2 年生を見ると、上位層の 3 人 (B, E, F) のプロジェクト受講時の評価の平均値の平均が 3.20 で、中位層の 5 人 (A, C, D, G, H) のプロジェクト受講時の評価の平均値の平均が 3.06 である。よって、プロジェクト受講時の評価と大学入学後の学業成績との相関がある程度確認されると考える。

しかし、下位にはプロジェクトで高い評価の 3.6 を得た受講者 I が位置したり、2.8 の低い評価とはいえ受講者 K は主要集団からかなり離れた低位置に位置したりしている。これは何故であろうか。

そこで、受講者 K と I を調べてみると、彼らは共に 5 教科以外の「ある教科」の専攻生であることが確認された。そこで、図 3 に示す様にその教科を専攻する学生 6 名 (α, β, γ, θ, I, K) を抽出して分析し直した。すると、この教科の専攻生 6 名全員が上位層に見られず、中位層以下に位置して、総じて低めの成績である。

また、この 6 名の専門教育科目に絞ってその評点を見ると 6 名全員に「秀」の評価が見られない。さらに、共通科目の評価も総じて低い。

これらの理由として、この教科では専門科目で厳格な評価がなされると同時に、実技科目の学習等で多くの学習時間が奪われることから、他科目を履修したり他科目を学習したりする余裕が無いのではないかと推察される。よって、「ある教科」の専攻生の低い学業成績を考慮すれば、

プロジェクト受講者のプロジェクト受講時の評価と学業成績にはある程度正の相関があると推定される。

#### 4 まとめ

本研究は、高校時代に福井大学で開催された「2050 年の未来の中学校のカリキュラムの作成」プロジェクトを受講した受講者を対象に、プロジェクト受講時のパフォーマンス評価と福井大学選抜試験の可否との関係、および入学後の学業成績との関係について分析・考察した。

その結果、福井大学で取り組んできた高大接続活動において、福井大学で実施するプロジェクトを高校時代に主体的に受講して大学で必要とされる能力を育成し、そこで評価された思考力とコミュニケーション力の高かった受講者が、選抜試験に合格した可能性が推定された。そして、合格した受講者のプロジェクトの評価が福井大学入学後の学業成績に反映されている可能性が推定されたと考える。

今後、本研究が高大接続研究に寄与できる様に、「2050年の未来の中学校のカリキュラムの作成」のパフォーマンス評価のプロジェクトをリファインし、その成果を追跡調査で検証して行きたい。その際、分析方法やプロジェクトに新たな視点を加えることにしたい。

まず、分析方法について述べる。当初の予想では、推薦入試やAO入試と異なり紙ベースで測定・評価される割合の高い一般入試において、合格者のコミュニケーション力の評価(2.85)が不合格者の評価(2.57)よりもかなり高くなることは予想していなかった【表2】。コミュニケーション力の差が予想以上に開いた理由の一つとして、個別学力検査で紙ベースの試験が課されず、実技や面接が課された教科の存在が推定される。しかし、今回の分析では一般選抜の教科別に分析することは出来なかった。今後、個別学力検査別に分析・検証する視点を加えたい。そのためにも、プロジェクト受講者の福井大学選抜試験の合否追跡調査を継続して、教科別に分析できる様にデータを積み重ねることにしたい。

次に、新たなプロジェクトについて述べる。2020年度は新たなパフォーマンス課題による高大連携探究プロジェクトとして、看護分野への進学を志す高校生を受講対象とする「2040年の未来の看護」とその評価を立ち上げる。ここで取り上げる未来は、高齢者人口が増加して一人の高齢者を1.5人の現役世代が支えると予想される2040年で(現在はおよそ2人が支えている)、現在の医療環境が大きく変化し在宅看護の拡大が予想されている。このプロジェクトの受講者は、ナイチンゲールの生涯とその活躍や、在宅看護にかかわる資料を参考にしながら、未来の看護について考察したり、グループワークで検討したり、その成果をプレゼンテーションしたりして思考力とコミュニケーション力を発揮することが求められている。そして、それらの能力の測定と評価にあたっては、これまで「2050年の未来の中学校のカリキュラムの作成」で培ってきたパフォーマンス評価が活用される。これにより、将来的には本研究と並行して、新プロジェクト受講時のパフォーマンス評価と福井大学選抜試験の合否との関係、および入学後の学業成績との関係について新たに分析・考察を蓄積することが出来る。

このように、今後は新たな分析方法の視点や新たなパフォーマンス課題の実践も取り込みながら、本研究で取り組んできたパフォーマンス評価の検証を深めて行くことにしたい。

## 参考文献

- Anderson, L. W., et al (Eds.) (2001). *A Taxonomy for Learning, Teaching, and Assessing*, Longman.
- 国立教育政策研究所(2013).『未来の学校づくりに関する調査研究報告書』平成24年度プロジェクト研究調査研究報告書(研究代表者:工藤文三)。
- 中切正人・橋本康弘・宮下伊吉・大久保貢(2019)。「AO・推薦入試を見据えた文系パフォーマンス評価——パフォーマンス課題「未来の時間割」の実践とコミュニケーション力の評価の分析——」『大学入試研究ジャーナル』29, 85-90.
- 中切正人・橋本康弘・宮下伊吉・大久保貢(2020)。「総合型選抜・学校推薦型選抜を見据えた文系パフォーマンス評価の研究——パフォーマンス課題の実践とルーブリックの分析——」『大学入試研究ジャーナル』30, 234-241.
- 日本交通計画協会自主研究会(2011).『2050年都市ビジョン研究会中間成果報告』
- 潮木守一(2004).『世界の大学危機』中央公論社。